



鎮守の森だより

NPO 法人 社叢学会ニュース

第 17 号

2005 年 9 月 12 日

第 2 回社叢インストラクター養成セミナー

社叢調査を実践的に指導

それぞれの地域の財産である社叢を詳しく調査し、その貴重性や現状を熟知し、それを様々な方法で人々に伝え、社叢を保護管理できる人材を養成する「社叢インストラクター養成セミナー」の第 2 回講座(期)が 9 月 3 日から 5 日までの 3 日間にわたって開催されました。今回は大阪・奈良の社叢を会場に、実習に基本をおいた講座が行なわれ、受講生は関東・中部・近畿・中国地方からの 13 名でした。

第 1 日目は大阪府豊能町吉川に鎮座する吉川八幡神社の社叢を会場に、先ず当セミナーの代表者である菅沼孝之副理事長が社叢の重要性とその植生について話された後、この日の講師服部保理事(兵庫県立大学教授)が社叢調査に使用する各道具の使い方や調査票の記入方法を説明し、植生調査の実習に移りました。

第 2 日目は奈良市西の京町に鎮座する養天満宮の社叢において、山倉拓夫理事(大阪市立大学教授)が講師として毎木調査と投影図の作成をテーマに、調査実習を指導されました。

第 3 日目は東大阪市出雲井町に鎮座する枚岡神社の社叢での実習と鶏鳴殿客間でのディスカッションが行なわれました。講師は菅沼副理事長と前迫ゆり氏(奈良佐保短期大学教授)で、植生調

査票の作成と読み方について指導されました。

(実習内容は 4 面参照)



吉川八幡神社での実習

社叢の風致と風致地区のまちづくり

講 師 中島 直人(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻助手)

青木いずみ(東京農業大学地域環境科学部造園化学科助手)

社叢学会関東支部 7 月の定例会は、大宮八幡宮(東京都杉並区)を含む和田堀風致地区を舞台に、社叢及びその周辺環境を守る手法としての風致地区の歴史的経緯や現況を理解するための勉強会及び現地視察を行った。

はじめに参加者全員で参拝の後、風致地区の核となる禁足地である社叢や境内地の由緒ある樹木に関して、鎌田宮司の先導のもと見学した。境内地は明治期から半減したというものの、ウラジロカシを中心とした適切に管理された社叢林、また、「共生の木」や「菩提樹」などの境内地の古木もよく保存されていた。



社叢林を見学する参加者

次に、中島氏より、風致地区とまちづくりに関するレクチャーがあり、都市計画としての風致地区制度導入の経緯、全国的な風致地区の指定状況、社叢の保全に関連する諸制度と風致地区との比較、そして風致地区を契機とした市民のまちづくり組織である風致協会の活動など多岐にわたる話題が提供された。和田堀風致地区に関しては、1933(昭和 8)年に多摩川、大泉、野方とともに「武蔵野の郷土色豊かな風景を存し、理想的の住宅地として今や開発されずむとする地域」の一部として、「市内希なる樹木美を持つ大宮八幡神

社の社叢」、「中心を貫流する善福寺川の清流とそれを囲む両岸高台の赤松混り雑木林の快適なる景趣」を特徴として、指定に至ったという。また、和田堀風致協会は、市民組織として様々な事業を展開していた。樹木の保護、社叢の修景はもちろんのこと、逍遥路の築造や(昭和 11 年)八幡園と称するポート池を造成(昭和 12 年)し経営を行った。そして、「土地開発事業又は之が助成を為すこと」を事業項目の 2 番目に挙げていたように、景勝地として地域の風致保育の向上と地方開発・土地開発の両立を目指していたことが分かる。

その後、和田堀出身という青木氏の先導で、風致地区内のまちあるきを行い、荘厳なる参道林、上記風致協会によって開設された八幡園の後身となる都立和田堀公園(昭和 27 年開園)、公園北側に位置する松ノ木遺跡、土地区画整理事業が行われた住宅地の視察を行った。手入れの行き届いた大宮八幡宮の社叢や参道林と比して、過度に繁茂した公園の緑や公園周辺の老朽化した商店などは風致地区の景観・風景としては、望ましいものではないという声が聞かれた。また、住宅地に関しても、当日午前中に有志で訪れた善福寺風致地区との比較から、緑被率や敷地規模の点で風致地区内の住宅地として改善の余地があるのではという苦言を呈する参加者もいた。

上記善福寺風致地区の指定区域が 29.2ha であるのに対して和田堀風致地区は 151,3ha と相当の地域的な広がりを持っている。今後、社叢や参道林、公園などの良質な緑の環境を保全し、そしてそれをいかに周辺地域に波及させ、緑豊かな良好な市街地を形成していくという課題に対して、風致地区の積極的な活用の検討も含めて、まさに今、大宮八幡宮や和田堀公園などの緑の環境を核とした地域づくりを進めていかなければならないと考える。

(文責:岡村祐)

次回予告(第 17 回関東定例研究会)

日 時：2005 年 10 月 29 日(土) 14:00～

場 所：國學院大学・渋谷キャンパス 120 周年記念一号館 1103 教室

(東京都渋谷区東 1-10-28)

講 師：原 正利(千葉県立中央博物館環境科学研究科長)

コメンター：奥富 清(東京農工大学名誉教授・社叢学会理事)

諏訪大社の社叢と御柱祭

講師
講師
コメンテータ

平林 成元(諏訪大社宮司)

宮坂 源吉(御柱の森づくり協議会会長)

上田 篤

(京都精華大学名誉教授・社叢学会副理事長)

諏訪大社の社叢について

諏訪大社には素朴な自然を対象とした信仰がある。現在、世界人口の2/3が唯一神を祀る宗教を信仰している。そこには他宗教との争いが常にあり世界中を不安に陥れている。チベットでは自然を崇め、多くの宗教が混然となった世界を作り上げている。土があり植物が生え森が育ち、神が宿る。多神教によって人間の良さが分かる。

諏訪大社は4社からなり、下社の春宮も秋宮も諏訪湖より離れた一段高い場所に鎮座するが、昔の諏訪湖はもっと大きく、神社は湖畔にあった。湖水が凍って盛り上がる「御神渡り」は-10の日が1週間から10日程続くと、南北に二本、東西に一本できる。起点に上社、終点に下社が鎮座する。夜中に音がした翌朝に「御神渡り」が現れるため、原始人はそれを神様の仕業と考え、自然への畏敬の念と神を鎮める気持ちが生まれた。神社創建から1500年以上を経ており、日本最古の神社の一つになっている。

4社には本殿がなく、上社は守屋山を、下社は大木をご神体として、祀りの場所に柱を立てて神をお迎えした。寅と申の年に御柱祭を行い、各社4本ずつ計16本の縦の御柱を立替え、同時に御宝殿も造り替える。

昔は信濃国を挙げての神事であったが、現在は4市2町1村の7自治体で行っている。大正期まではそれ程人は集まらなかったが、前回は180万人が参加した。市町村長が先頭に立って、政教分離もイデオロギーの対立もない。役所も小学校も休みになる。セイコーエプソン本社も日程が発表されると1週間程の休みとなり、全国の支店の社員は何故休みになるのか分からないそうである。御柱祭の年は、地域全体が参加し、子供たちも様々な行事に参加する。規律を守らないと危険な祭りであり、従わない子は近所の人々から叱られて、地域が一つになって子ども達を健全に育み、祭りの年は青少年の犯罪がなくなる。

チェーンソーや重機を使えば、数人が数日で片付ける仕事であるが、文明や効率ではなく、人間の原点に帰ることで人間の良さが分かる。地域の文化を守り育てることで、子ども達が育ち、健全な町づくりが行われることになる。

「御柱の森」における取り組み

「御柱祭」は日本三大奇祭の一つとして知られており、御柱用材は、上社では八ヶ岳の御小屋山の社有林等から、下社では霧が峰に近い下諏訪町の東俣国有林から切り出されている。南信森林管理署では、国有林内に約400haの「御柱の森」を設定し、御柱用材を育む会・諏訪大社・下諏訪観光協会・下諏訪町木遣り保存会・下諏訪町の5団体からなる「御柱の森」づくり協議会を発足し、地域の住民とともに資源調査や森林整備を行い、伝統文化を支える森づくりに取り組んでいる。

御柱用材は、過去にはヒノキ、サワラ、スギ、カラマツ等も使用されたが、近年はウラジロモミの胸高直径1mに近い大木が使用される。腐りがなく通直な大木が必要で、最近5回の使用状況は胸高直径60cm台が6本、70cm台が11本、80cm台が13本、90cm以上が10本となっている。

平成8～14年に行った「御柱の森」の毎木調査では、胸高直径31cm以上のウラジロモミが1,629本あり、内御柱に使用可能なものは990本あった。60cm以上に成長するのに約120年、最も太い一の柱に使う90cm以上になるのに約190年かかる。平成16年の申年の祭りで「秋宮一の柱」に使われた180年生のウラジロモミは、90年生のヒノキ人工林の中にあり、90年前に先人が百年後の祭りのために残したものであった。

今後は、ウラジロモミの積極的な保存や、つる切り、照度確保の除間伐が必要で、ニホンジカの食害防止対策のための頭数調整も課題となっている。

次回予告(第7回中部定例研究会)

日 時：2005年10月8日(土) 13:30～16:00

場 所：多賀大社参集殿(滋賀県犬上郡多賀町、Tel.0749(48)1101)

テーマ・講師：多賀大社の社叢について 中野 幸彦(多賀大社宮司)

野間 直彦(滋賀県立大学講師)

コメンテータ：

土屋 敦夫(滋賀県立大学教授)

社叢インストラクター養成セミナー 実習内容(9月3日~5日)

第1日目 吉川八幡神社の社叢は豊能町保護樹林第1号といわれ、シイの大木が群生。実習はまず傾斜20度の斜面に10m×10mの調査区を設置し、その範囲内の樹木(高さ1.5m以上)の幹の太さ、樹高などを測定記録。次にこれらの樹木を高木層・亜高木層・第一低木層・第二低木層・草本層に分類し、階層ごとに種名を記録、最後に各種の被%を記録して作業終了。実習後、里山林ではわが国屈指といわれる猪名川上流域の里山景観を見学。

第2日目 養天満宮の社叢は奈良市指定文化財、天然記念物で原始林的な森林形態を保っている。実習は平地の参道脇と拝殿裏の2箇所に調査区(10m×10m)を設置し、2班に分かれて調査区内の樹木に標識ラベルを取り付け、樹種・樹高・胸高直径などを測定。さらに下層植生やツル植物を調査。



枚岡神社社叢の話聞く受講生

第3日目 枚岡神社の社叢は昭和初期頃までは「宝基の森」と呼ばれ、樹齢数百年の杉や広葉樹で覆われた豊かな森であったが、その後の度重なる風水害で森の一部が崩壊。しかし、まだまだかつての面影を残す社叢。実習は雨中、30度の傾斜

地で行なわれ、足もとをとられるなど悪戦苦闘の植生調査であったが、2班に分かれての作業はそれぞれに調査票を作成して無事終了。午後はこの調査票をもとに、森の状況などについてディスカッション。さらに、標本採集した十数種類の樹木の枝葉を前に、樹種の同定方法や森林構造について学習した。

編集後記

いよいよ愛・地球博も会期末まであとわずか。お陰さまで千年の森も大過なく無事、会期末を迎えようとしております。これも偏に会員の皆さま初め、ご寄附を頂戴した皆さま、ヴォランティアとして東屋に詰めて下さった皆さまのご支援によるものと、深く感謝いたしております。ありがとうございました！開幕一週間前に某運送会社から「それ、場外でしょう」と言われた千年の森にも、8月末現在で約12,000人が来られ、中には(2人だけだけど)「会場内でいっちゃんよかった!!」とわざわざお電話を下さる方もいたりして、うれしいような、面映いような。ほぼ一年間にわたって会場の変化を見守ってきた「天空鎮守の森」が地上に戻ってくるのも、もう間近。ほんと~にお疲れ様でした(風、強いだよ。あんなに高いと)！
(藤岡 郁)

原稿募集！

『社叢学研究』(第4号)への投稿：従来どおり論文、研究ノート、資料紹介や調査報告(各400字詰原稿用紙40枚以内)のほか、新たに会員通信「鎮守の森の活動報告」を募集します(下記参照)。今年度の投稿締切りは、いずれも11月30日(水)必着。

「鎮守の森の活動報告」：祭り、音楽会、問題点など。B5判1200字(市販のもの<コクヨ>を使用)。横書き。手書き、ワープロ、イラスト、写真入り、いずれも可。

次回予告(第17回関西定例研究会)

日時：2005年9月24日(土) 13:30~15:30

場所：ビル・葆光(ほうこう)6階大道 中京区室町通御池南入ル 075-211-4171)

テーマ：照葉樹林の語源と照葉樹林の種多様性

講師：服部 保(兵庫県立大学教授・社叢学会理事)

発行人 社叢学会事務局 〒604-8115 京都市中京区蛸薬師通堺町西入雁金町373番地
みよいビル303号 TEL075-212-2973 FAX 075-212-2916
URL <http://www2.odn.ne.jp/shasou/> E-Mail shasou@ams.odn.ne.jp
社叢学会関東支部 〒171-0021 豊島区西池袋2-36-1 ソフトタウン池袋1101
TEL03-5950-6507 FAX03-5950-5184 E-Mail shasou@macrovision.co.jp